

阪東本教行信證と著作過程

禿 氏 祐 祥

『教行信證』が眞宗の根本聖典として宗祖親鸞に依つて起草されたことに就ては疑ふ餘地はないが、その内容は可なり複雑で、著作の年代を明示する正確な文献がない。然るに幸なことに、その草稿本が現存し、門人に依て寫されたと推定される古寫本も二部現存してゐる。草稿本は門人性信を開基とする東京淺草の報恩寺に傳はり、最近國寶に指定せられ、修理が加へられつつある。一般に阪東本として知られてゐるが、これは報恩寺が設立されて以來千葉縣の横曾根に存在し、阪東報恩寺と稱せられてゐたからである。大正十二年、關東大震災の當時淺草別院の金庫内に保管されてゐた所から、高熱の爲め紙質に變化を生じ保存の爲めの必要から修理を加へることとなり、本年四月、著手されたのである。この修理に依て從來の研究とは異つた角度から本書の成立過程を知ることができはしないであらうかと考へ、私の見聞する所を述べることにした。

親鸞の主著である所の『教行信證』には成立した年代を示

す字句が見當らない。化土卷に元仁元年を基準として正像末三時の年代を計算してゐられるから元仁元年五十二歳以後であることが推定される。教卷から化土卷まで次第を追うて書かれたとすれば元仁元年には七八分通りできてゐたことになる。然しながら『教行信證』の性質に就て考へると、本書の中心となるものが最初にでき上り、これに幾回か加筆修正を加へ、更に尾緒を附けてこれを後世に遺されたと解される。最初の出發點である構想として化土卷も含まれてゐたであらうから、元仁元年を根據とする年代の計算は『教行信證』の製作過程として初期に屬するものと推定することも可能である。親鸞の著作として起草または書寫年代の判然してゐるのは七十歳以後であるから『教行信證』だけを切離して早く完成されたとは考へられない。而して寶治元年親鸞七十五歳の二月には門人の尊蓮に書寫を許してゐられるから、その著作年代を五十二歳から七十五歳までの二十三年間と見て大過がないものと思はれる。尊蓮が筆寫してから後にも時々加筆

修正されたことがあり、また修正すべき部分もそのまゝになつてゐる所もあつたと思はれる。存覺の『六要鈔』卷三本に『此書大概類聚之後、不^レ幾歸寂之間、不^レ及^ニ再治』

と述べてゐるのは此間の消息を傳へるものと考へられる。以上の點から判斷すると、本書の著作は元仁元年五十二歳の頃に著手せられ、その後幾度となく推敲を加へ、寶治元年七十五歳の頃には大略でき上り、故參の門弟に對して特に書寫を許し得る程度のものとなつたと断定し得るのである。本書は大正十一年原寸大影印複製本四百部が作製されたが、この時は綴ぢたままで寫眞に撮影されたとのことである。今面は全部綴糸を除き補強法として裏打を施すことにしたのである。紙質は幾種類にも分れてゐるので修理もこれに應じて手加減が加へられ、元來の強靭性が充分に保たれてゐる分には様を加へるに止め、卷五の眞佛土巻の如きは極めてもろくなつてゐるからこの種のものには悉く裏張を加へることにしたのである。古文化財の修理はなるだけ原形を變更しない様にして裏張の爲め幾分厚さが加はるが、これは止むを得ない。綴直して仕上げる際に本紙を切落さないことにした。

この度阪東本『教行信證』の修理が加へられるに當り、綴糸を取除かれるとなれば、これに依つて何か新らしい事實が現はれるか、この書の著作過程に何等かの示唆を與へる様な

史料が現はれるかと可なり緊張した態度でこれに臨んだのである。私は最初からこの修理事業に參加してゐたので、眼に觸れた事柄の大要を述べることにしよう。

損害箇所は教卷が最も甚しく、取扱上の不注意に依つて鼠が咬破つたものと思はれる。寶物の曝涼または開帳を行つた際に夜中教卷の部分を披いたまま放置してあつたので、鼠が糞を作る材料にと咬破つたのであると思ふ。殘餘の紙片に裏張を行ひ綴込んでゐるが、その方法は極めて無雑作であるから、今回の修理では断片の位置を原本通りとし、また取除かれてゐた「平等覺經言」以下の半葉六行も舊位置に復原した。この殘葉は報恩寺の住持が何人かに譲渡したと思はれるもので幸に東本願寺に保管されてゐた爲め關東大震災の際も熱氣の浸透を免れ、他の部分が黃色を呈してゐるのと對照することができる。鼠咬の年代は判然しないが、寺寶の開帳、曝涼（蟲干）⁽¹⁾は毎年行はれたであらうし、また二十四輩の舊蹟巡拜の人々から要求されて拜觀させたこともあつたに相違ない。化土巻にも三ヶ所ばかり缺損がある⁽²⁾。何人かに譲渡したか、不用意に由りて脱落したか、盜まれたか判然しない。表紙は最初の分が破損して取換へられてゐるが、その破片と思はれるものが殘存し、三寸ばかりの紙捻も見出された⁽³⁾。私は綴ぢる際に生じた穴が何かの参考にならぬかと注意したが、その穴には徑一分ばかりのもの、その1/2ばかりのもの

つて、幾回か綴直した際に新しい穴が作られたことを示してゐる。一冊として綴あげられる前に假に若干を綴ぢて置いたと思はれるものもあつて綿密に調査したら研究上に益する所があると思ふ。阪東本の臨寫本が文政年間の頃、順藝に依つて作製せられ、また大正十一年に影印本も作られたから、筆跡等の研究に於て誠に都合がよいのであるが、紙質等に就て知らんと欲する際は原本に依らねばならない。用紙は三種類であるとの説も行はれてゐるが、手當り次第に用紙を求められたのであるから三種類と限定することはできない。特に異様に感ずるのは表裏両面を使用された場合が少くないことである。行卷の五八、五九、信卷の三五から七六までの四十二枚、眞佛土卷の二六、二七、化土卷の一八、一九、二二、が両面使用の部分である。綴絲を除いてよく調べると何れも綴代の所に折目があり、粘葉として書寫されたことが判然したのである。この形式のものは信卷に多いが、信卷だけではなく、行卷にも眞佛土卷、化土卷にもあるから、信卷別撰説の史料とはならない。また化土卷末の三から二六までの二十四枚は巻子本として書寫されてゐる。これをも他の部分と同様方冊本とする爲めに二十四枚に切斷し、綴代とする部分に細い紙を繼足してゐる。二枚續いてゐる所も二ヶ所ある。また文字のある一行が誤つて綴込まれた所がある。この部分は今回修理で始めて現はれたのであるから影印本に於ても勿論

見ることができない。即ち化土卷末の八の終行「無量百千」から「兜率陀天子護持養育北^ノ譯單越」の一行十三字をぬかして次の九初行に移り「他化自在天」云々となつてゐるのはその爲めであつて、この度の修理で綴代から始めて現はれた次第である。これは宗祖かまたは侍者の蓮位かの過失であらうが爾來これを改むる者がなく、修理が縁となつて雲間の月の如く現はれたのである。また綴ぢる時に別の紙で背を包んだことがあつたことを示す紙片が僅かばかりではあるが殘存してゐる。本書は草稿本である所から不用な文句は墨を塗つて除去したり、また餘白のままとなつてゐる所もある。欄外に斜線を引いた所が多いのも何の爲めか判然しない。化土卷本の二三、二五の二ヶ所に花押と思はれる形狀のものか記入されてゐる。これまた不明である。現在は六冊に分たれ、證卷と眞佛土卷とには標題の傍に釋蓮位と宗祖自ら記入されてゐるが、他の教行信等の卷々と雖も標題を記した紙が残つてゐたとすれば矢張り、證卷と同様に釋蓮位と記入してあつた筈である。卷尾に沙門性信と署名し花押を記してゐるが、蓮位から直接性信に渡したか、或は蓮位から覺惠または覺如に傳へられ更に性信の手元に送られたかその邊の事情も明瞭でない。また弘安陸二月二日釋明性讓預と之を記入してゐるのは性信より明性に渡されたことを示すもので讓預の語は譲受け當分手元で大切に保管し、更に他日適當な人物に渡すことを表

明した文句の様に思はれる。この度の修理に於て知り得た事柄では、最初から絲綴ちの方冊本として起草されたのではない、粘葉式を採用されたこともあり、卷子本式とされたこともあり、最後にその全部を方冊本に仕上げられた事が何人も豫期しなかつた所である。宗祖の著作として最初に起草されたのが『觀無量壽經註』『阿彌陀經註』である。年代は元久元年三十二歳前後と推定される。その頃から始めた古典の抄錄と共に卷子式になつてゐる。この點から考へると化土卷の一部は割合に早く起草されたものと推定される。化土卷はその地位から云ふと、附錄の様なものであるから、その最も重點の置かれてゐる信卷には最初から勢力を傾け、再三再四稿を改め、崇重の度を増さん爲め粘葉式に書寫されたのかと思はれる。阪東本が稿本である以上はこれを手離すことができず、蓮位に授けられたとしても常隨眞近の徒であるから、平素鄭重に保管し必要の際には宗祖にお目にかけたであらう。この稿本の外に定本として自ら書寫するかまた門人に書寫させた一本があつたのでなからうか。尊蓮の書寫したのは定本とも云ふべき一本を用意し、不時の災難で稿本が滅失した時の事を考へて書寫せしめられたのであらうと推察する。この問題を決定する爲めには高田専修寺本、西本願寺本と對照して三本の比較研究を行ふ必要がある。

1 武江年表には安永六年正月と天明三年三月の條に淺草報恩寺で親鸞上人遺物を所觀させたと記してゐる。

○真佛土卷の二四、表と裏との中間「不差故曰成就抄」(裏書)、「讚阿彌陀佛偈曰」(缺損)、曇鸞和尙造也(上方欄外)、南無阿彌陀佛(釋名無量)(缺損)

○化土卷本六末行「大經」の次、「言諸少行菩薩及修習少功德者不可稱計皆當往生、又言、況餘菩薩由少善根生彼國者不可稱計」光明寺釋云、含花未出、或生邊界或隨胎宮。(缺損)
○化土卷本二八、「又如彌陀經中」の次「一日七日專念彌陀名」號得生、又十方恒沙諸佛證誠不虛也、又此經定散文中唯標專念名號得生、此例非一也、廣顯念佛三昧意」(缺損)
○化土卷本二九、「又勸一切」の次、

「凡夫一日七日一心專念彌陀名號定得往生、次下文云、十方各有恒河沙等諸佛同贊釋迦能於五濁惡時西世界衆生、」

4 3
この度修理の進行中に現はれた物件は整理して保存される。
修理の進行中に現はれた物件は整理して保存される。
山田文昭氏が『眞宗史之研究』一三三(教行信證の御草本に就て)に於て「用紙の種類は極めて雑多で、中には反古の紙背に書かれた所もあり、往々断片を用ひた所もある」とし、

日下無倫氏は『阪東教行信證』(圖版略解題二)に於て「用紙の種類は凡そ三種にして美濃紙最も多く、所謂寫經紙鳥の子様のもの)並に繪旨紙(薄藍色)これに次ぐ」とされてゐるが、實際に調査すると主要の分だけでも七八種はある。